



### 1 クマハギ

ツキノワグマは春から夏にスギやヒノキなどの針葉樹の樹皮を剥ぎ、その内側の形成層を歯で削り取って採食します。この行動はクマハギと呼ばれ、樹齢が30〜50年程度の生育が良好な立木に被害が発生する傾向があるため、被害額が大きくなります。クマハギは西日本を中心に古くから被害が報告され、大きな問題となつていますが、岩手県では稀にしか発生していません。一方で、近隣の県では今まで被害が無かった地域でも近年被害が拡がっている地域もあります。なぜ被害が稀なままの地域と拡がる地域があるのでしょうか？

### 2 「犯人」の特徴

私は共同研究者と一緒にクマハギの被害木に付着したクマの体毛を集めて、遺伝子を用いた個体識別により「犯人」の特定に成功しました。この結果、興味深いことがわかってきたのです。まず、その地域に生息しているクマ全てがクマハギを行っているわけではなく、クマハギをする個体としない個体がありました。そして、クマハギをする個体は特定の「家系」に偏つてることがわかったのです。

### 3 クマハギは学習で伝わる

どうやら、このクマハギという行動は子グマが母グマから教わっているようなのです。クマハギをする母



写真撮影：佐藤嘉宏（一関市在住）

### グマを持った子グマは、大人になつてもクマハギを続けるのでしょうか。

一方、クマハギをしない母グマを持った子グマは、それを知らずに育ちます。つまり、クマハギをしない個体は「しない」ではなく、「知らない」のです。こうしてクマハギを「する家系」と「しない家系」が出来ていきます。

### 4 被害が拡がらない理由

クマハギが稀に発生し続ける地域と、被害が拡大する地域の違いを考えてみます。まず、なんらかのきっかけで「樹皮を剥いで食べると美味しい」と知った個体が出現します。それがメスだった場合、育児を通して子供にクマハギを伝え、その子供がさらに子供に伝え…と「クマハギをする家系」が成立して被害が拡大していくのでしょうか。一方で、「最初の個体」がオスだった場合は、オスは育児をしないのでその行動を他個体に伝える術は有りません。また、他地域で母グマからクマハギを教わった後に独り立ちして遠くに旅し



てきたオスが被害を起こしている場合は、稀な発生がその後も継続されます。

### 5 もし被害が拡大したら

この被害拡大の過程はまだ仮説の域を出ていません。しかし、今後岩手県でも被害が拡大する可能性が無いとは言えません。「クマハギをする家系」が確立されてしまえば防除は対処療法しか無く、そのための労力的・金銭的コストが継続的に必要になってしまいます。被害拡大の兆しが見えたときには駆除等によりすぐに加害個体をその地域から取り除くことが肝心です。

森林総合研究所東北支所

大西 尚樹

019 (648) 3961